



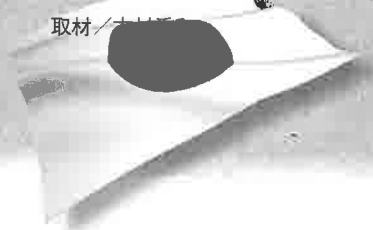
OBが観た ロンドンオリンピック



日本柔道の 敗因と対策

2012年夏に行われたロンドンオリンピックは、男子は金メダルゼロ、女子は1個獲得したが優勝候補筆頭とされていた選手が軒並みに敗退して、全体的には敗北感が漂う大会となった。果たしてOBの目にはロンドン五輪はどのように映ったのか。この章ではかつて世界を制した著名なOBに、4年後の日本柔道再建のために意見を聞いた。

取材／



「総合的に強い選手を作らないと勝てない」

藤猪 省太8段



ロンドンの男子の総括は、弱いから負けたんです。簡単なことです。監督やコーチは調整不足などと言っているけど、根本は選手が弱いから負けた。

自立していない、個性がない選手で勝てるはずがありません。自分が試合するので自分から考えないと…。代表に選ばれたら人頼みではないでしょう。自分で練習も調整もやれるようにならないと話にならない。それが欠けていた。日本人はやり易いと思われていたのではない。

もう一つ言いたいのは、審判員のあり方です。強化のためには技を磨いて研究することは大事ですが、審判員も大会などでもっと厳しく試合させる事を考えないといけない。私は選手強化と審判委員の両方をやりましたが、日本の審判は甘い。

だから、選手は日本の感覚を持って世界で試合するので「こんなはずではなかった」と言うことになり、不利な状態になると頭が真っ白になって力を発揮できなくなる。

日頃から甘い審判員の中で試合をしていることが、選手を甘くしている。IJF（国際柔道連盟）試合審判規定より厳しいくらいにやっていたら、国際大会に行っても面食らうということはない。審判員もしっかりせよと言いたいですね。

ダラダラしていたら、ガンガン戦うように仕向けるのも審判の役割ですよ。

そういう審判員を育てることも、回り回って選手の強化につながると思います。今はIJFルールといっても日本ローカルで戦っている。それではダメですよ。

女子の方は激しさがなかった。松本薫が「闘志が出ていて」とほめられているが、私に言わせればあれが当たり前のこと。格闘技なんだから、生きるか死ぬかなんだ。その気迫は他の選手からは感じられなかった。

組み手の点でも、日本選手は組み負けていた。つかめないと言うが、それは努力してつかめるようにならないからですよ。切られない技術はあるんです。そういう技術で先にポイントを取れば、相手は必ず向かってくる。そうすれば逆にこちらが「一本」取りやすい状況が作れるんです。チャンスが大きくなるんです。試合はそういう自分有利な状況を作って、相手を追い込んで勝つ

ということも大切です。

日本選手は「オリンピックは特別」という意識が強すぎる。国際大会の一つと考えればいいんです。「オリンピックはすごい、特別だ」というのは言い訳に過ぎない。リオは男女とも、総合的に強い選手を作らないと勝てません。男子は特にきつい。若い選手は型にはめずに、自分で考えられるような選手を作らないとロンドンの二の舞になる。

合宿なども、ただやれば良いというものではない。強化合宿なんていうものは情報を与えればよいのであって、技は所属で作るのが合理的なんです。

それも選手が自分で考えて作っていくのが望ましい。コーチや監督はそれをサポートすればいいんです。自立して、自分で考える選手を育てていけない限り、大舞台で力発揮できる日本代表は作れません。



「日本選手は組み手で負けていた」という藤猪氏。「それは努力してつかめるようにならないといけない」とも指摘する

1950年5月11日生まれ、香川県出身。天理高-天理大。

現在は天理大教授。

1971年ルドウイグスハーフェン、73年ローザンヌ、75年ウィーン、79年パリ世界大会中量級、78kg級チャンピオン。